

詩經の博物学的研究 (2)

—— 虫の博物誌(承前)

加 納 喜 光

8 蟋蟀・莎雞

蟋蟀在堂 歲聿其莫——唐風・蟋蟀 (I/1・2)

六月莎雞振羽 七月在野 八月在宇 九月在戶 十月蟋蟀入我牀下——豳風・七月 (V/2~6)

〔8—a〕二つとも直翅目の昆虫である。蟋蟀、莎雞、また同類の他の名称は、往々混同されている。朱子が七月篇の注釈で、「斯螽・莎雞・蟋蟀は一物で、時に随い変化して名を異にする」と書いたのはその最たるものであるが、すでに『古今注』が混同のさきがけをなしている。しかしそれより前に陸璣が、「蟋蟀は蝗に似て小さく、漆のような正黒で光沢があり、角と翅がある。一名は蜚・蜻蛚、楚では王孫、幽州では趣織（『太平御覽』卷九四九の引用では促織に作る）と呼ぶ」と述べ、また、「莎雞は蝗の如くで斑色、毛翅は數重、翅は正赤である。別名は天雞。

六月に飛び、羽を振るゐ素々という声を出す」と述べているように、両者は明らかに別の種類である。

蟋蟀はコオロギ科の各種を指すようであるが、特に中国で普通種の *Gryllus chinensis* に当てられている。これは体長が一三—一六ミリで、全身が黒色で光沢があり、褐色の剛毛がある（『中葉大辞典』）。鳴き声は「リリリリ」という連続した四音節だという（『辞海』生物分冊）。周堯によれば、戦闘の上手な *Scaphedrus aspersus* のほかに、キリギリス科の聒聒児（*Macropoda elongata*）、また、油葫蘆、梆子頭、金鐘児など数十種以上が蟋蟀に含まれるとする。そうするとコオロギ科とキリギリス科の一部を含むことになる。莎雞は右に出た聒聒児、つまりクツワムシの古称である。⁽²⁾陸璣の記述の中で、斑紋があるというのは当たっているが、色は褐色型と緑色型とがあつて、正赤ではない。しかし素々という音色はクツワムシの軋軋^{チャッチャー}軋軋^{チャッチャー}という音（『辞海』）と似ている。

〔8—b〕蟋蟀と莎雞の混同あるいは同一視の原因は、それらの異名と絡んでいるように思われる。蟋蟀の異名の一つに促織（趨織・趣織）、莎雞のそれに紡績娘、紡線娘、絡緯、絡糸娘などがあり、ともに機織りに関連した命名である。陸璣によると、趣織という語は督促に語源があるとし、「趨織鳴けば懶婦驚く」という諺を引く。要するにコオロギは秋になって女の機織りの仕事を催促するように鳴く虫であり、それが鳴き出すと怠け女は責められるというのである。ところが『古今注』では「促織の鳴き声は急いで織るようで、絡緯の鳴き声は紡績のようだ」とあり、促織も絡緯と同様に音声に由来すると見なした。下つて宋の羅願は、促織は急に織るようだから促織といい、また、それが鳴く時は紡織の候である、絡緯は紡糸の音のようだから梭（ハシ）雞といい、絡糸の時候に当たっていると述べ、両案を折中させた（『爾雅翼』）。このような具合に言葉の類似に由り促織と絡緯を同一視した形跡がうかがえる。わが国で『和名抄』が促織を「波太於利米」と訳したのは全く右と同じ混同を襲ったものであるが、「はたおりめ」が実は現在のキリギリスのことだとすると（新井白石『東雅』）、『和名抄』の和訓は機械的な当て方で、中身を検討

しなかったとの譏りは免れまい。もっとも蟋蟀の条では「歧利歧利須^{きりきりす}」の訓を与えており、それは逆に現在のコオロギのことであるから、正しい。⁽³⁾

現在の中国ではクツワムシのことを俗に聒聒児、あるいは蝻蝻児と称しているが、劉侗が「促織志」で指摘するように、聒聒という鳴き声に由来する命名である。日本人の耳には馬の響^{うま}と似た音に聞こえるので、クツワムシをまたガチャガチャとも呼ぶ。明治の人西村真次は日本と中国と米国のクツワムシを表す語音を次のように比較している。

日本 Gachagacha, Kachakacha

中国 Gogoa, Kwoakwoaru

米国 Kaydid

いずれもK音もしくはG音から始まり、ともに虫の鳴き声を写した音象徴とした。⁽⁴⁾今の中国では前記のようにクツワムシの鳴き声を軋軋軋と形容しているから、日本のガチャガチャと似ていなくもない。もっとも中国産のものと日本産のものとは形態が少し異なり、音声も必ずしも同じとは限らない。しかしいずれにせよクツワムシとコオロギは明らかに異なった鳴き声であるから、促織の命名はやはり陸璣の言う通り季節に由来すると見るべきである。⁽⁵⁾

促織の俗称である蝻蝻児は右の蝻蝻児と似た語であるが、むしろ王念孫や郝懿行の言うように、蟋蟀の別名である蝻の転音か、あるいは促織の転音とすべきであろう。⁽⁶⁾

〔8—c〕コオロギが季節を告げる虫だとする中国人の意識はきわめて古い。季節・気候と生物との関係を研究する分野に「物候学」というものがあり、生物気象学、あるいは環境生物学とも称すべき中国独特の学問であるが、その萌芽は秦漢の頃までさかのぼる。すなわち『大戴礼記』夏小正、『礼記』月令、『吕氏春秋』十二紀、『淮南子』

時則訓など、物候に関する体系的な記録がある。もちろん先秦時代にも断片的な記述はあるのであり、『詩経』の七月篇は物候を詠み込んだ最古の記録とされている。『詩経』に現れる虫のシンボリズムの中で、ただ蟋蟀（莎雞を含む）だけが時間の推移を表すために用いられている。

蟋蟀の季節に関しては『逸周書』時訓解に「小暑（夏至と大暑の間）を過ぎて五日壁に居る」とあり、また『論衡』變動篇に「夏の末蜻蛉が鳴き寒蟬が啼くのは陰気に感ずるからである」とあるように、夏から夏の終わりがとされている。ところが一方では『易通卦驗』に「立秋蜻蛉鳴き、白露下り蜻蛉堂に上る」（『太平御覧』卷九四九所引）とあるなど、秋の虫とされることも多い。文学作品に登場する蟋蟀はだいたい秋の季語だといってよい。

現代の物候学では、物候観測の目安として、蟋蟀は三つの昆虫（他は蜜蜂・蚱蜢）のうちの一つに挙げられている。⁽⁸⁾その方法は蟋蟀を各地域における鳴き始めと鳴き終わりを記録するのである。北京での観測によると、鳴き始めは季夏（七月二十九日～九月十二日）、鳴き終わりは季秋（十月十四日～十月二十五日）となっている。⁽⁹⁾冒頭に掲げた七月篇の一節を、鄭箋に従って「七月在野、八月在宇、九月在戸」の主語を蟋蟀として読むと、七月に野で鳴き始め、八月に家の軒へ、九月に戸口へ、十月にベッドの下へと、寒気とともに次第に屋内に入ってきて来ると解釈できよう。そうすると現代の物候と驚くほど一致する。もっとも暦法の問題や、時間（今を去ること三千年）や空間（北京と彬県は緯度で四〇度と三五度、ほぼ日本の盛岡と静岡の間隔）などを考慮に入れると、完全に一致するはずはない。⁽¹⁰⁾唐風（今の山西省地方の歌謡）の場合は、蟋蟀が堂に上るのは歳末となっている。この違いは全く暦法の違いである。すなわち幽風・七月篇が幽曆（夏曆と一致）で月を数えるのに対し、唐風・蟋蟀篇は周曆を用いている。⁽¹¹⁾幽曆（夏曆）の十月は周曆の十二月に当たるので、幽と唐（晋）の物候に違いがなかったことが判明する。

以上蟋蟀が『詩経』では秋の気節、あるいは歳末の到来を告げる物候として使われ、後世では秋の季節感を表すモ

チーフとして使われていることを述べた。最後に、『詩経』とは関係がないが、昆虫の文化史上特筆すべき一項を付言したい。それは唐の開元（八世紀）の頃、蟋蟀を飼養し、その鳴き声を観賞する風と、また同時に、蟋蟀を闘わし
て楽しむ遊戯が発生したことである。後者は宋以後ますます盛んになり、南宋の宰相賈似道が金軍の侵攻の際にも群
妾とその遊戯に没頭していたという話が伝えられている。それは単なる遊びではなく一種の博奕であり、官が蟋蟀を
上納させたり、産を破る悲喜劇がしばしば起こったほど弊害も大きかったらしい。しかし蟋蟀に関する詳しい観察や
飼養法の研究が発達したことも見逃せない。科学史家サートンは言う、「將軍賈似道は、蟋蟀に関する論文を書い
た。回教徒を含めた西方人たちは、大きな動物や、馬、犬、鷹など特別な動物にいつそう興味をもっていたが、
中国人は昆虫に特別の注意を払った。だから、おどろくべき蚕産業を発展させてそれを利用することを知ったのが中
国人であって西方人ではなかったのは、当然のことである。……かれらの昆虫への興味のうち、養蚕以外で最もい
じるしい面は蟋蟀についての異常な空想であった。かれらはやがてその鳴き声をいろいろな種類に区別し、最良の音
樂家を産ませ飼育することを学んだ。また、蟋蟀に組打ちさせるスポーツもはじめたが、これはこの愛玩虫の値打ち
を空想的に高めた。こうして蟋蟀の文献が発展したが、そのうち賈似道の『促織経』が最古のものであった」⁽¹³⁾

9 伊威

伊威在室——幽風・東山（Ⅱ／7）

〔9—a〕 同定に二つの説がある。リードは『動物学大辞典』に従い *Porcellis* sp. すなわち甲殻類等脚目のワラジ
ムシ類に当てる。⁽¹⁴⁾ 一方、最近の『中葉大辞典』では *Armadillidium vulgare* すなわちワラジムシ科の中のダンゴムシ

（オカダン・ゴムシ）に当てている。ワラジムシは体長一センチぐらいで楕円形、七節の胸部からなり、淡黄色の斑紋と粗粒状の突起の横列がある。枯葉・塵埃の下、床下などに棲息する（北隆館『日本動物図鑑』一九四七年版）。ダン・ゴムシもほぼ同様の形態であるが、捕らえると体を球形に丸める習性のある点が大きく違う。棲息場所は朽木・枯葉・石などの下である。

伊威は薬用虫として早くも『神農本草経』に鼠婦の名で登載されている。『本草衍義』の「一名、湿生虫。足が多く、その色は蚓の如く、背に横紋が蹙起する。長さは三四分、しきがわらや下湿の場所に多い」や、陸璣の「壁根の下、かめの下の土中に生じ、白魚に似る」という情報だけでは、ワラジムシかダンゴムシかいずれとも決め難い。「中国の本草書に体を丸める習性を言わないのは驚くべきことだ」と言うリードはダンゴムシと取り違えているが、逆にその習性を記述していないことがワラジムシであることを示しているかもしれない。

〔9—b〕 わが国でワラジムシに当てるのは非常に古い。古くは『本草和名』で「於女牟之」（ワラジムシの古名）と訓ずる。ワラジムシの名は比較的新しいようで、せきだむし（せったむし）の方言もあるように、おそらく虫の形が草鞋わらじと似ていることに由来する命名であろう。この名が近世の中国で鞞底虫（段玉裁『説文解字注』）、ないし草鞋虫（朱駿声『説文通訓定声』）と言ったのと関係があるのか、あるいは偶然の一致なのかはわからない。江戸初期の『多識編』は「乃美牟之」（トビムシまたはワラジムシの異名）と訓じ、その後、『大和本草』でトコムシ（南京虫？）、あるいはノミムシとしたり、『和漢三才図会』で鼠婦にトビムシ、塵にオメムシの訓を当てるなど、混乱しているようである。⁽¹⁶⁾しかし稻生若水、小野蘭山はワラジムシに同定し、江村如圭はワラジムシとトビムシの混同の不可を指摘している。

伊威の通り名を鼠婦という。陶弘景は『本草経集注』で鼠負と書くのが正しく、鼠の背に負うから鼠負だという語

源説を立てる。しかし負が別名の蟪（『爾雅』）から来ているように、鼠も別名の委黍（『説文』）の黍と同音通用であり、鼠とは関係がない。⁽¹⁷⁾ 鼠婦や鼠姑の名を得たのは伊威の薬効の一つに「婦人月閉」（『神農本草経』）があるためか、逆にその名があるためにその効用がうたわれたのかはわからない。しかし物の名のイメージが往々独り歩きする例はしばしばある。宋の陸佃は「鼠婦はこれを食らえば人を善く淫せしめる」と述べ、とうとう媚薬に昇格させたが、⁽¹⁸⁾ これは何首烏や淫羊藿の類である。⁽¹⁹⁾

〔9—c〕 幽風・東山篇は東国に出征した兵士が帰還の道中故郷と妻を空想する詩である。第一スタンザでは、遅々とはかどらぬ帰還兵士の歩みが、⁽²⁰⁾ 蠅になぞらえられ、第二スタンザでは、故郷の家と田園の殺風景が描かれ、第三スタンザでは、ひっそりと待つ妻を空想し、第四スタンザでは、新婚当時のことが回想される。伊威は荒涼たる風景を造型するモチーフの一つとして利用されている。その描き方は、先ず果蠃（キカラスウリ）が軒場に這い移る情景から入り、次いで床下から家の中に侵入するワラジムシとなり、それから戸口に網を張るアシナガグモと描き、その次に家の外に視点を移し、道端の鹿の足跡、最後にその付近の水辺でツチボタルの光る夜景という具合に、荒れ果てた田園のイメージを植物、虫、獣でもってみごとに現前させる。中でも部屋に発生するワラジムシという極端に小さな虫をもってきたのは奇抜であり、しかも表現効果が大きく、後世の詩人の思い及ばぬところであろう。

10 蠅 蛸

蠅 蛸在戸——幽風・東山（Ⅱ／8）

〔10—a〕 クモ形類のアシナガグモ *Tetragnatha praedonia* である。別名を喜蛛、喜子、蟪母などと称する。体も足も細長いクモで、体長は約一・五センチ、体色は黄褐色である。人家の付近や、水辺、樹間に棲み、水平の円網を張る。

わが国では『新撰字鏡』や『和名抄』以来、アシタカグモ *Heteropoda venatoria* に当てるのが普通である。クモの仲間では両者とも足の長いのが特徴だが、アシタカグモは体が細くないし、しかも網を張らない徘徊性のクモである。陸璣の「蠨蛸は長跼のことで、一名長脚という。…蜘蛛の如く網羅してこれに居る」や、『古今注』の「蠨蛸は身小さく足長し」などの記述によれば、アシナガグモに当てるのがふさわしい。しかし日本では古くアシナガグモのことをまたアシタカグモとも称したらしく、そのため江戸期の本草家をも混乱させている。もっとも古い中国でもアシタカグモをアシナガグモからどの程度区別していたかは定かでない。

〔10—b〕 蜘蛛がクモの総名である。その名の由来について、王安石は『字説』の中で、「一面の網を設け、物が触れるとそれを誅する。誅の義を知っているから蜘蛛という」（『埤雅』引用）と述べているが、もとより牽強附会の説である。しかし民間語源説が一般の人々の考えを左右することも多い。蜘蛛は昔の聖人が網を造るのに手本としたくらい知巧のある虫とされている。このような名に負わされたイメージは、中国医学で、蜘蛛の網が健忘症に効くという効能書を付け加えるに至った（『名医別録』⁽²¹⁾）。これはもともとそれを衣のえりに着けておく物忘れしないという一種の呪術から来ており、それはまた上記の知巧のイメージから発するものであろう。

蠨蛸の語源については、陸佃は、蠨蛸は、蠨梢⁽²²⁾であり、長跼の状態の形容から来しているとする。蠨蛸には「細長い」という意味があると王国維も指摘しており、この説は間違いない。蜘蛛については王国維が次旦^{ししよ}（行き悩む様子）と同源とするのは、当たらずといえども遠からずである。⁽²³⁾ 一般に虫の名には不思議と二音節語が多い。植物の場合、

一音節語は中国原産のもの、二音節以上の語は、だいたい、渡来のものに付けられた名称だといわれるが、⁽²⁴⁾ 虫の名に双声や疊韻の二音節語が多いのは形や鳴き声などに因む音象徴だからであろう。もっとも命名をいちいち穿鑿しても意味がない。ただ民間語源との対比上明らかにしておく必要はある。

〔10—c〕 東山篇の蠨蛸は前項でも述べた通り、ワラジムシなどとともに、荒涼たる風景を造型するモチーフの一つとして使われている。アシナガグモが入り口に網を張っている情景はいうまでもなくそこに人の住んでいないことを予想させる。ところが第三スタンザへ読み進むと、その廢屋に実は女性がいることを発見する。部屋の主の虫から女への変貌は、読者に軽い驚きを与えつつ、詩人の空想の転換を劇的にさせるのである。また、空閨を守る女性に間もなく訪れるであろう突然の喜びが、あまりにも殺伐たる状況の中で起こるハブニング——ここに詩人の狙いもあった。

昔の詩の解釈者に、アシナガグモの出現がある象徴性を帯びると見た者があるのは、右のような意想外のイメージの転換を読んだために違いがない。すなわち陸璣が「荊州では喜母といい、これが人の衣に着くと、親しい客がやって来て喜ばしいことがある。幽州ではこの虫を親客という」と述べるのは、アシナガグモのシンボリズムを前提として言っているかの如くである。もっともこのシンボリズムは『西京雜記』や『劉子新論』あたりに初めて現れ、せいぜい漢代までしかさかのぼれない。むしろ『詩經』の解釈からこの觀念が世に広まったと見るべきかもしれない。めでたさのシンボル、あるいは、待ち人の到来を表すシンボルとして後世の文学作品にも登場するクモは、虫の文化史上豊かな一項を加えたのである。

アシナガグモとは限らないが、クモにまつわる一現象が文学のモチーフとなった、もう一つの項目について触れておきたい。それはいわゆる「遊糸」のことである。宋の羅願は「春秋の二時、暖風を得て生じ、游糸を吐き、その身

を飛揚させる。春の月には、游糸の長さが数丈ばかりにもなる。すべて蜘蛛の爲すところである」と述べ、クモの觀察の正確さを示している。⁽²⁵⁾この現象を初めてクモと結びつけたのがいつ頃かは明らかでないが、遊糸の語は5〜6世紀頃の詩に現れている。⁽²⁶⁾日本では平安時代に、糸遊^{いとあそ}あるいは「かげろう」として中国文学から直輸入して詩歌のモチーフにしたが、果たして実体をつかんで用いたのであらうか。現在も生物現象が気象現象によく誤解されている。

蠨蛸の外に古典に出るクモに蛛蟴^{とと}（『爾雅』）がある。これは蠨蛸とも書き、また、音が転じて顛当とも称される。トタテグモ *Lalouchia davidi* をいう。唐の段成式の『西陽雜俎』にやや詳しい觀察記録があり、このクモは土の中に巣を作り、地面と平行したふたを開閉して昆虫を捕らえると記している。また、当時の「顛当よ顛当よしっかり門を守れ、蠨蛸（ジガバチ）が襲うと逃げられぬ」という童謡を紹介しているが、ジガバチがトタテグモの天敵であることが知られている証拠になる。このクモを釣る兒童の遊びもあつたらしい。劉崇遠の『金華子』によると、細い草を穴にさしこんでクモを釣り出す競技を「釣駱駝」と呼んだという（郝懿行『爾雅義疏』）。中国遊戲史の一齣として興味深い。⁽²⁷⁾

11 宵行

町囃鹿場 燐燐宵行——幽風・東山（Ⅱ／9・10）

〔11—a〕 宵行は螢のことであるが、種の名ではなく、特殊なもの的一般名、すなわちツチボタルである。ツチボタルとは羽毛の退化した幼虫状の雌、および発光する幼虫を含めた呼び名で、この類の呼び名にミズボタルやクサボ

タルがあり、ある種の幼虫を指す。ホタル科の種類はすこぶる多いが、中国では螢火、または螢火虫という語が用いられ、*Luciola terminalis* (『辞海』)、あるいは *L. niticollis* (『中藥大辞典』) すなわちゲンジボタルに当てられている。代表的な種を当て、他はそれにひっくりかえっているようである。(28)

前掲の東山篇の一句について、宵行を虫の名とするか、それとも熠燿ゆうきやうを虫の名(または別の何かの名)とするかは、古来議論のあるところである。毛伝は「熠燿は燐なり、燐は螢火なり」とし、螢火を燐と同一視するかの如くであるが、漢代にそのような信仰でもあったのであろうか。毛伝(29)の読みによれば、「熠燿は宵に行く」ということになる。これに対し朱子は熠燿を形容詞、宵行を虫の名とし、「蚕の如く、夜行く。喉下に光あり、螢の如し」と述べている。この説では「熠燿たる宵行」と読むことになる。朱子と同時代、または少し前の羅願は、「今一種あり、蛆うしの如く、尾はまた火を帶ぶ。但翼たなく飛ばず。名を蛆螢と為す」と述べ、明の李時珍は螢に三種あるとし、一つは普通のホタル、他の一つは「長さ蛆蠅けんの如く、尾後に光あり、翼なく飛ばず。乃ち竹根の化する所なり。一名、蠅けん、俗に螢蛆と名づけ」、それを宵行といい、もう一つは水螢で、水中に居ると述べている。これらの記述から見ると、蛆螢(または螢蛆)はツチボタル、水螢はミズボタルに当たるようである。彼らがこれをホタルの一種としたのは間違いだ(30)が、觀察は確かなものを含んでいる。(31)

ところが熠燿を螢だとする説の方が古い。すでに『名医別録』ではそれを異名として挙げているし、晋の張華の勵志詩に「熠燿宵に流る」の句があり、また、潘岳や傅咸の螢火賦では熠燿を虫の名として用いている。その後も宵行よりもむしろ熠燿の方が詩文に多く登場する。日本の本草家では、稻生若水と茅原定が熠燿を螢とする説にくみして論じている。ただ後世の詩文に多く熠燿を用いていることだけでは根拠が薄い。なぜ宵行ではなく熠燿が虫の名とされるに至ったのかは、別に考えなければならない。

〔11—b〕 螢の異名に、即照（『爾雅』）、夜光（『神農本草經』）、放光（『名醫別錄』）、耀夜・景天・宵燭（『古今注』）、挾火・拋火（『埤雅』）等々があるが、一見して螢の發光に因む命名であることが明らかである。だいたい「螢」という文字も、虫と𧈧（け）（丸く取り巻く小さな光）の略体から構成されている。漢語のホタルの命名法が主としてこの通りだとすると、熠燿がそれと結びつくのはごく自然である。熠燿は明るく光を放つことを意味する。熠燿を螢とする人は、宵行の行を雁行の行と同じく飛ぶ意味に解している。^{（32）}ところでこの説の難点は、東山篇の後のスタンザでは、「倉庚ここに飛ぶ、熠燿たる其の羽」とあり、形容詞として用いられていることである。この場合の熠燿は明るく輝く羽を形容している。同一の詩の中で、特徴的な双声語が、一方は昆虫の名、一方は形容詞として両用されるのはやや奇異に思われる。江村如圭もこの点を突いて、ともに形容詞と見なすべきだと言っている。^{（33）}そうすると宵行が虫の名ということになるが、ホタルの命名法からはやや外れる。^{（34）}

〔11—c〕 前述のように毛伝が螢火を燐としたのは、もし螢を人魂と考える民間信仰があれば面白いが、漢以前には証拠がない。羅願は、「畏るべし」（Ⅱ／11）の語に引かれて、毛伝は鬼火で解釈したものだと言っている。9・10行目は家の周辺の野生に逆戻りしたかの如き荒涼たる風景の描写であり、9行目で鹿の足跡、10行目で螢（ツチボタル）をもってくる。前者は昼の情景、後者は夜の情景であり、ともに地上に視点を据えた描写である。しかもともに視覚的表現でありながら、一方は形跡、他方は光という実体の見えない影によって風景を造型するという技巧を凝らしている。

後世の文学作品における螢のイメージは、興趣ある夜の一点景、秋の季節感のほかに、殺風景のモチーフがある。例えば李賀の還自会稽歌に「野粉椒壁黄なり、湿螢梁殿に満つ」という句がある。これは『詩経』の影響というよりはむしろ螢が腐草から発生するという古代の信仰が下敷きになっていると思われる。生物の発生に関しては先秦時代

から化生説が普通に信じられていたらしく、とりわけ昆虫において著しいという。⁽³⁵⁾ 秦漢のころの『礼記』月令に「季夏、腐草螢と為る」と記してある。古代人は虫の変態という現象を知らないため、幼虫にも別の名をつけ、一つながりのものとは見ない。ところが螢の場合は、成虫も幼虫も同じ種だとされていた。螢が茅（チガヤ）の根の化したものだとする李時珍さえ、幼虫を螢の一種に入れている。螢の幼虫は成虫と同じように発光するので、容易にこの認識に達したと思われる。

螢を用いた児童の遊びについて『花鏡』が記している。それによると、二十四ほど捕らえて袋に入れ、夜、火の代わりとして本を読み、それを「宵燭」と称したという。これは有名な晋の車胤の故事にならっているのかもしれないが、それ自体シンボリカルな説話である。隋の煬帝が数斛（一斛は約六〇リットル）の螢で山谷を照らしたという話も、右と同様日常性を超えた遊びの世界に属している。

12 虺・蛇

維虺維蛇 女子之祥——小雅・斯干（Ⅶ／4・5）

〔12—a〕 蛇はもちろんへび類を表す総名である。各種のへびの名は一般に蛇などの字を加えた複合語で表す。ただ蝮・蟒・蝮・虺・虺・虺・蝮などは単名でも使われた。⁽³⁶⁾ その中で蝮はマムシ類であるが、虺との関係が古来問題になっている。諸説を検討する。

一、虺と蝮を同じとする説

『爾雅』𧈧魚で「𧈧𧈧は博さ三寸、首の大きさは擘の如し」とあり、『説文』も虫の条で同様の説明がある。すなわち𧈧と𧈧（虫）を同じと見ている。⁽³⁷⁾『爾雅』の舍人注は江淮以南で𧈧、江淮以北で𧈧というとして、方言の違いに帰した。唐の蘇敬は『新修本草』でやはり一種としている。

二、𧈧と𧈧は同類で、大小の違いとする説

李時珍は陶弘景の「𧈧は形短かくして扁」や、『食経』の「𧈧は色土の如く、小なること𧈧蛇の如し」を引いて、𧈧は大きく𧈧は小さいものとする。

三、𧈧と𧈧は全く別種とする説

『漢書』田儋伝の顔師古の注に晋の郭璞の説を引いて、「𧈧蛇は細頸、大頭、焦尾で、色は綬文の如く、文間に毛あり、猪鬣に似る。鼻の上に針あり、大なる者は長さ七、八尺、一名反鼻」と述べた後、それに対して「𧈧は土色のごとく、所在にこれ有り、俗に土𧈧と呼ぶ。𧈧はただ南方に出ず」としている。郭璞の記述は少し割り引かねばならないとしても、𧈧の大きな特徴として「鼻上に針あり」とか「一名反鼻」と記しているのが注目される。⁽³⁸⁾

頭の先がとがっていたり、上に突き出ている変わった蛇がいくつかある。ツノクサリヘビは目の上にとがったうろこが角のように立っている。⁽³⁹⁾ただしこの蛇はアフリカやアジアの砂漠地帯に棲み、中国に産したかはわからない。ハナガクサリヘビはその名の通り、鼻先が反りかえっているという。この蛇は西アジア方面に産する。以上はクサリヘビ科の中のクサリヘビ亜科の蛇で、この種の蛇は多少とも鼻が反りかえっているのが特徴のようである。中国では同科の中のマムシ亜科の一つに、ヒヤッポダ（百歩蛇）があり、鼻先がとがって上に向いている。また、別の科に尖喙蛇というものがあり、鼻先が錐のようにとがり、錐吻蛇の別名をもつ。⁽⁴⁰⁾郭璞の記述と照合すると、『山海経』の𧈧蛇はヒヤッポダがモデルとなっているように思われる。

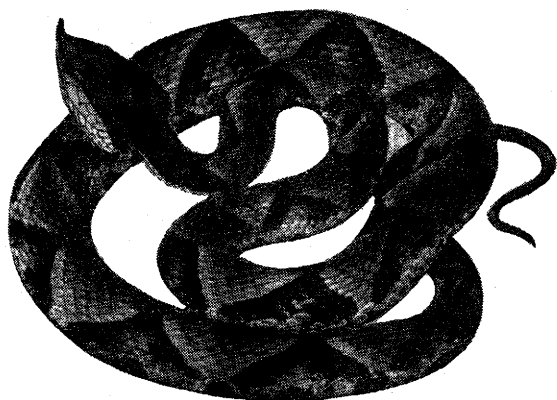


図1 五步蛇（尖吻蝮） *Agkistrodon acutus*
（『中国蛇類図譜』）

る蝮蛇、つまりマムシ (*Agkistrodon halys*) と考えられる。

マムシは全長五四〜八〇センチで、体色は灰褐色から土紅色までいろいろ変化があり、黒褐色の円形ないし波状の横紋が並ぶ。吻端は円い（図2）。中国の北部、中部に広く分布する。⁽⁴²⁾ 土公蛇、土灰蛇、土球子、地扁蛇などの別名がある。これは前述した顔師古のいう「土虺」と同じものであろう。郝懿行が虺について「福山棲霞では土脚蛇といひ、江淮間では土骨蛇という。長さ一尺ばかり。頭尾相等し。状は土色に類す」（『爾雅義疏』）というのとも一致する。以上の通りだと、蝮蛇はヒヤッポダ、虺はマムシということになるが、古くは蝮蛇にはヒヤッポダとマムシ

ヒヤッポダは中国医学で白花蛇 (*Agkistrodon acutus*) と称されて

いる（図1）。全長五四〜一八〇センチで、頭は大きく、平扁で、三角形を呈する。体色は背面が灰褐色で、両側に八型の暗褐色の斑紋があり、腹面は黄白色である。湖北・浙江以南に産する。⁽⁴¹⁾ 吻の上向する特徴から、賽鼻蛇、尖吻蝮の別名があり、また、それに咬まれて五歩ないし百歩行く間に死ぬほどの猛毒を有するといわれるところから、五步蛇、百步蛇と称される。この蛇が初めて本草書に登場するのは宋の『開宝本草』からである。いっぽう蝮蛇の名はすでに『名医別錄』に出ている。陶弘景の注では、「黄黑色、黄領尖口、毒最も烈し」とあり、この記述から判断するとヒヤッポダの特徴に近い。なお、同書の虫部の有名無用では虺類の項が出ており、「一名虺短、土色にして文」の説明があるが、これが恐らく後のいわゆる

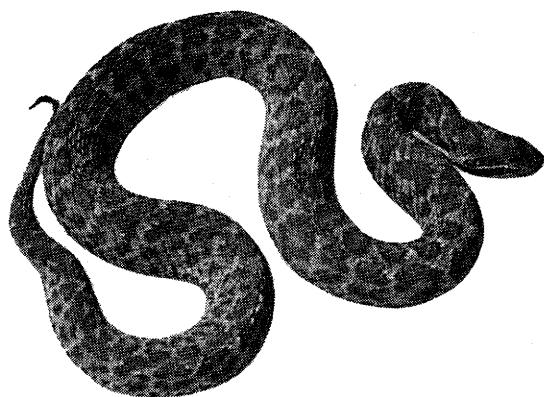


図2 蝮蛇 *Agkistrodon halys*
(『中国蛇類図譜』)

の両要素が含まれているように思われる。唐の『新修本草』には「蝮蛇は地の色を作し、鼻反り、口又長く、身短かく、頭尾相似る。大毒。一名𧈧蛇」とあり、唐の陳藏器の『本草拾遺』には、「蝮蛇は形短かく、鼻反り、錦文。亦地と同色なる者あり。足に著けば足を断ち、手に著けば手を断つ」とある。陳藏器の咬傷の説明は『漢書』田儋伝に基づいているが、これはヒヤッポダの特徴にふさわしい。ヒヤッポダの毒はマムシより激烈である。⁽⁴³⁾唐の柳宗元の捕蛇者説に「黒質にして白章」とある毒蛇はまさにヒヤッポダのことで、また、同人の有蝮蛇文では蝮蛇を「褰鼻鉤牙」と説明している。このようなこともと蝮蛇はヒヤッポダとマムシの両方を兼ねていたため、李時珍は蝮蛇と白花蛇を別出しているにかかわらず、蝮蛇に両要素を混淆させたのであろう。しかし一方ではヘビ類に対する觀察

は次第に進んでいたから、二種のマムシを区別する必要も起り、どこにでも見られる普通のマムシを虺と称するに至ったと思われる。この虺は元来前記の通り蝮の別名、または方言であった可能性がある。『詩経』に出るほど古いのであるから、むしろ虺の方が普通のマムシを表す語だったのかもしれない。

〔12—b〕 蝮蛇の別名の一つに前述の反鼻がある。この語は吻の反りかえっているヒヤッポダの特徴とよく合う。ところが李時珍は白花蛇の別名を褰鼻蛇、蝮蛇のそれを反鼻蛇と分けている。虺を反鼻蛇とする説も多い。ここには前述のような混乱があるようである。日本にもこの混乱が持ち込まれている。新井白石は『東雅』で、『和名抄』の

説を用い、日本語のヘビ（波美、倍美）は反鼻の字音の転化だと述べている。果たしてそのような漢字音からきた語が疑わしく、狩谷掖斎も牽強だと否定した。なお、林羅山は蛇に「古久知波美」、虺に「美知可久知波美」を当てているが、いずれも本草書の直訳による造語である。

「12—c」蛇は古典に頻出し、そのシンボリズムを考察するには別に稿を改める必要がある、ここでは『詩経』における蛇のシンボリズムを検討するに止めておく。

斯干篇は建物の落成を祝いつつ、一族の和合と繁栄を祈る歌である。⁽⁴⁴⁾第一―五スタンザで建物の建設の模様と完成の姿を描き、第六―九スタンザで子孫の誕生を祝福する。第六スタンザで当家の主人の夢について、「吉夢は維れ何ぞ、維れ熊維れ羆、維れ虺維れ蛇」と歌えば、次のスタンザがそれをうけて「維れ熊維れ羆は、男子の祥、維れ虺維れ蛇は、女子の祥」と夢判断をする。熊／羆、虺／蛇という四つの動物は、鄭箋の解釈によると、ともに吉祥で、前者は山にあって陽の祥であるから男を生むシンボルとなり、後者は穴処し陰の祥であるから女を生むシンボルとなる。王安石もほぼ同様の解釈をして、熊／羆は力強く勇壮であるから男子の祥、虺／蛇は柔弱で隠れ伏すから女子の祥だとしている。いかにも儒教的な発想である。

蛇はきわめて両義的な生物の一つである。第一に分類がはっきりしない。常識的には『説文』などのように虫の類に入れられているが、『爾雅』や『広雅』では魚類に分類されている。これは鱗という共通点があるからで、『本草綱目』ですら、魚も爬虫類も鱗部で括られている。第二に蛇の神話的イメージと現実的イメージの対立である。宇宙や人類の創造と関係のある女媧は人頭蛇身で、また、兄妹にして夫婦である伏羲と女媧の神体は蛇の尾を交じたものであり、したがって、蛇はエロスの象徴となっている。このような二つの存在の合体、雌雄同体という観念は、『爾雅』釈地にある「四方の異氣」という象徴的存在に体现されている。すなわち、比目魚、比翼鳥、比肩獸、比肩民、

枳首蛇が東西南北と中央に配置されているが、実はこれらは宇宙の調和（天子の徳という形で実現される）があるときに中国に現れるものである。したがって広い意味でのエロス（宇宙論的）の象徴といってよいかもしれない。⁽⁴⁵⁾ところがこれらはあくまでも「異気」なのであり、枳首蛇のモデルである両頭蛇は現実に忌諱された。孫叔敖が両頭蛇を斬ったという有名な説話が『賈誼新書』にある。この蛇は頭と尾が見分けのつかないほど似ているもので、中国に三種いるといわれる。⁽⁴⁶⁾

以上のような両義的存在としての蛇のイメージを考慮に入れると、斯干篇における蛇とマムシはむしろ不吉なシンボルかもしれない。第八スタンザでは、男の子が生まれるとベッドに寝かせ、裳を着せ、璋（官吏の持つ礼玉）を与えて、室家の君王たれとことほぐが、最終スタンザでは、女の子が生まれると、地面に寝かせ、^{むつき}裼を着せ、瓦（紡錘）を与えて、「非もなく儀もなく、酒食のことだけを心掛け、父母に心配の種を残さぬように」と祈る。このように男女の扱いが全く異なるのは、父権社会の下では当然かもしれない。それだけ女性の地位が低かったのであるが、マムシにたとえつつも、女子の誕生をことほいだのは、男女というペアを尊んだ理由からに違いない。

13 蜴

哀今之人 胡為蜴蜴——小雅・正月（Ⅵ／7・8）

〔13—a〕 蜴蜴を二つの虫とする説と、一つの虫とする説がある。毛伝は「蜴は蜥なり」としているから、蜴（マムシ）と蜥の二つと見たのであろう。後世、朱子など多くこれに従っている。しかし陸璣は「蜴蜴は一名蜥蜴蜴な

り。或いはこれを蛇医と謂う。蜥蜴の如く、青綠色、大きき指の如し。形状惡むべし」と述べ、一物の名とする。これによると蜥蜴と違った虫ということになるが、蜴をストレートに蜥蜴と見ないのはなぜであろうか。毛伝の場合はむしろ蜥と蜥蜴がシノニムだとする了解があったのではなからうか。

古くはトカゲの類は判然たる区別がなかったように見える。『爾雅』では「蜥蜴は蜥蜴、蜥蜴は蜥蜴、蜥蜴は守宮なり」として、すべてを守宮で括っている。『方言』では「守宮は秦晋西夏でいう語で、一名蜥易。南楚で蛇医、あるいは蜥蜴という」として方言の違いに帰する。『説文』は棲息場所で区別して、「壁に在るものが蜥蜴、草に在るものが蜥易」だとする。そのほか形態と棲息場所で区別する説もあり（『新修本草』『本草綱目』など）、紛糾を極める。

蜥蜴が広くトカゲを表すことは問題がない。現在の名を石龍子といい、一般に *Eumeces chinensis* (シナトカゲ) や *E. pekinensis* (キタシナトカゲ) に当てられる。守宮と蜥蜴はヤモリである。問題は蜥蜴である。『説文』に「蜥蜴は蛇医なり」とあり、蛇医は『本草綱目』では蛇師、蛇舅母と同じになっている。現在、蛇医、蛇舅母はカナヘビに同定されている（リード、『動物学大辞典』、『辞海』）。したがって前に引いた陸璣のいう蜥蜴はカナヘビと思われる。ところで、現在蜥蜴は中国でも日本でもイモリに当てられる。日本の場合は、恐らく江戸時代から始まったようであるが、平安時代では蜥蜴は蜥蜴と同じくトカゲになっている（『本草和名』）。中国でも古くは『爾雅』などのように蜥蜴はトカゲとされていたようであり、本草書を調べても、蜥蜴をイモリに当てる根拠がない。

以上、毛伝が『爾雅』に従ったとするなら、蜥はトカゲであり、陸璣がトカゲ類を区別して説を立てたとすればカナヘビ（カナヘビ科のトカゲ）ということになる。しかし蜴をストレートに蜥蜴とするに如くはない。

〔13—b〕 トカゲは体色を変えるから、易の名がそこから起こったとする説が古くからあるが、恐らく俗説である

う。しかしトカゲ類の中にはカメレオンのように色彩を変えるものもある。カメレオンは中国に産しないが、『本草綱目』の載せる十二時虫は、その名の通り一日の十二時に随って変化するとされている。その形態的特徴は、頭から背にかけて冠幘のような肉鬣があることである。リードはこれを *Calotes alvristatus* に同定しているが、これは『広西薬用動物』に記載する *C. varicolor* (馬鬃蛇、変色鬣蜥) と同種のものであろう。形態と習性はまさに十二時虫と一致する。普通、十二時虫の別名である避役をカメレオンに当てているが、誤りということになる。ヤモリも休色を変える保護色があるというから、古代の中国人がトカゲ類が色を変えたと考えたのは不思議ではない。

〔13—c〕冒頭に掲げた正月篇の二句は、マムシとトカゲでもって当時の民衆を風刺したものである。詩の全体のテーマは「社会悪を憤る孤独者の憂い」であり、統治者の無能と腐敗を指摘し、それにより被る民衆の悲惨について述べている。しかし、作者はそのような虐げられる民衆に同情を寄せつつも、マムシやトカゲのような民衆を非難しないではいられないのである。虺蜴の隠喩について、鄭箋は「虺蜴の性、人を見れば則ち走る」といい、恐怖や臆病のたとえと解釈したようである。朱子は虺も蜴も「毒螫の虫」と見て、害毒をなすものの隠喩としている。虺のイメージは前項で調べた通り、恐ろしい毒蛇であるとともに、両義的であいまいな存在、不吉な存在であり、蜴のイメージは潜み隠れる存在であるほかに、色を変えて人をたぶらかす存在である。したがって虺蜴は、圧政のために陰險になり、隠れて悪を為す民衆の姿を浮き彫りにする隠喩となっている。

14 蜮

為鬼為蜮 則不可得——小雅・何人斯(Ⅷ/1・2)

「14—a」 蜮はすこぶる空想的色彩に富む昆虫で、最近までその正体が知られていなかった。『詩經』のあとは『楚辭』大招に出るが、その具体的イメージは漢以後の文献に現れる。後漢の許慎は『說文』で「蜮は短狐なり。鼈に似て三足。氣を以て射て人を害す」と記し、その形態を神話的動物に近づけている。同時代の服虔は『春秋左氏伝』の注釈で、「短狐は南方の盛暑の生ずる所で、其の状は鼈の如く、古は無く今有り。沙を含み人を射て、人の皮肉に入り、其の瘡は疥の如し」と述べ、産地と、その虫による病状を加える。下って三国の陸璣は別説を出し、「江淮の水浜に皆これ有る。人が岸上に在って、影が水中に在れば、人の影に投じてこれを殺す。故に射影という。南方の人は水に入るとき、先ず瓦石を水中に投じて水を濁らして後に入る」と述べている。西晋の張華は虫の形状を「甲虫類で、長さが一二寸、口中に弩の形あり」（『博物志』）とやや具体的に記しているが、東晋の葛洪にいたると、更に具体的で、かつ新しい情報を加える。彼によると、「状は鳴蜩の如く、大きき（孫星衍の校による）三合盃に似、翼有りて飛び、目無くして利耳。口中に横物角弩有り。もし人の声を聞けば、角弩の如き口中の物に縁り、氣を以て矢と為し、則ち水に因りて人を射る」（『抱朴子』登涉篇）という。形状が詳しくなればなるほど、ますます神秘的なイメージから離れない。

蜮が溪鬼虫の名で本草書に登載されるのは、唐の陳藏器の『本草拾遺』が最初である。同書には「大きき鶏子の如く、蜎蜎（タマオシコガネ）に似、頭に一角有り、長さ寸余、角上四岐有り、甲下翅有りて能く飛ぶ」とあり、初めて神秘性を脱するが、藥効が「その角を取って帶びれば溪毒を避ける」にあるのは、やはり呪術性から免かれない。明の李時珍にいたって詳細な報告が出た。彼によると、「射工は長さ二三寸、広さは寸ばかり。形は扁、前は闊く後ろは狭く、頗る蟬の状に似る。腹は軟かく背は硬く、鼈の如く甲を負い、黒色。六七月に甲下に翅有りて能く飛び、鉞々の声を作す。闊頭尖喙、二骨眼有り。其の頭目は醜黒、狐の如く鬼の如し。喙頭に爪の如き尖角有り、長さは一

二分。蟹の足の如き六足有り。二足は喙下に在り、大にして一爪。四足は腹下に在り、小にして岐爪。或る時は前足を双屈し其の喙を抱拱す。正に横弩上矢の状の如し」(『本草綱目』)とあり、観察の詳しいことはあたかも実見に基づくかのである。しかし『本草綱目』に付けられた絵図(図3)や、その他の絵図(図4)を見ると、まだ空想的、神秘的なイメージが消えていない。



図3 溪鬼虫
(『本草綱目』
人民衛生出版社)

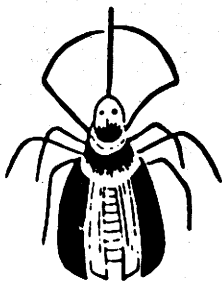


図4 蜮
(徐鼎『毛詩名物
図説』和刻本)

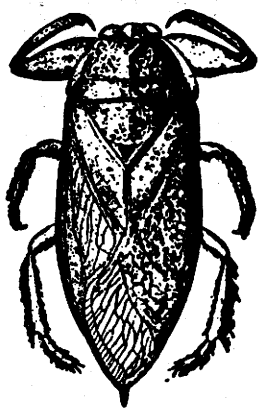


図5 田 蟹
(『科技史文集』第4輯)

右の『本草綱目』の記述から、リードは、鞘翅目の water-beetles の一つであろうが、タガメの肉食性が見過こされてはならないとして、中国からマレーやアンナンまで民間伝承の広まっている *Belostoma* (タガメ) に言及している⁽⁴⁸⁾。最近、周堯氏は清の李元の『蟪舘』の記事(実は前に引いた『本草綱目』とほぼ同一)により *Belostoma* sp. に疑いないとしている⁽⁴⁹⁾。現代中国では田蟹と称する(図5)。

タガメは体長が六〇ミリ内外、扁平で、暗灰色を呈し、水田や淡水中に棲む半翅目の昆虫である(小野田勝造編『原色図説動物大辞典』一九四三年版)。この昆虫は東南アジアで食用にされているらしいが、なぜ中国では恐るべき空想的な虫になったのであろうか。一つの理由は比較的大きいうえに(タガメ科の大形種は一六〇ミリにも達するという)、形態が醜いと感じられたこと、しかも前脚が弩

(石弓)の形に似ているため、弓を射るのと連想されたからであろう。前に引いた文献では、沙を射る、あるいは、気を矢にして射るとあるが、人の影に尿を放ち人を病ませるといふ蠅蝮(ハサミムシ)の例と同様、ガスを出すヘッピリムシなどがモデルになったのかもしれない。もう一つの理由はタガメの悍猛な性質が観察されていたからではなからうか。素木得一氏によると、「タガメ類は淡水に於けるまぎれもない悪魔で、昆虫や貝類や魚類やオタマジャクシや蛙やサンショウウオやその他の水棲動物を捕食する」そうである。⁽⁵¹⁾

〔14—b〕 蛾の別名である射工、射影、水弩などは、タガメの形状や、気を発射すると考えられたことに基づいている。『酉陽雜俎』の抱槍も、弩との連想が働き、腹の下に槍のような刺があると空想されたためである。短狐の狐は弧に作るのが正しいと段玉裁は言っている(『説文解字注』)。蛾については古く前漢の劉向の解釈がある。『漢書』五行志に「敞公十八年の秋に蛾が発生した。劉向が思うに、蛾は南越に生じる虫である。越の地には婦人が多く、男女が川にいっしょに入る。淫女が主となるので乱気が生じる。故に聖人は蛾と名づけた。蛾とは惑という意味だ」というようなことが記されている。これは害虫の発生を為政者の道德的責任に帰する災異思想の一つである。このような考えに對し、後漢の王充は、杜伯の亡霊が弓を射て周王を殺したのも、南方の毒である短狐が人を射るのも、太陽の熱気の変化によるのだといった唯物論的思想を示している(『論衡』言毒篇)。

〔14—c〕 『詩經』では鬼と蛾とが並列されているから、その当時すでにタガメは恐ろしい昆虫と見なされていたと推定される。何人斯篇は夫に棄てられた女が夫を呪詛する詩である。⁽⁵²⁾ そのだいたいの内容は、夫の愛が途絶えて自分のもとを訪れてくれぬことを縷々と述べた後、夫と愛人との睡み合いを想像して嫉妬の炎を燃えあがらせ、最後に「鬼^た為^り蛾^た為^り、則ち得べからず」の句をたたきつけるのである。この句を導くまでの前段階に表現上の伏線が敷かれている。先ず、「彼何人ぞや」(I/1)というその人の存在をいぶかしく問う定型句で起こし、第三、四スタン

ザの冒頭で繰り返す。第三スタンザでは「我其の声を聞けど、其の身を見ず」(Ⅲ/3・4)と、姿の見えぬ不審といらだちを述べた後、次のスタンザで男心の気まぐれを「其れ飄風た為り、胡なんぞ北よりせざる、胡なんぞ南よりせざる」(Ⅳ/2・4)と、方向のない風にたとえる。以上は、いるにはいるがつかみどころのない存在への詰問が含まれた表現である。次に、初め直接夫を指さないで「彼」や「誰」という疏遠な感じを表す指示代名詞・疑問代名詞から起こし、第五、六スタンザで自分を訪れてほしいというかすかな願望を述べるときに親称の「爾」を用い、その期待がすべて打ち碎かれたとき、呪詛の言葉をたたきつけるために、化け物と昆虫をもってくる。この隠喩は以上二つの技巧の収斂であり、夫という人間が彼女にとってもはや人間でないグロテスクな存在に変貌してしまったことを最も効果的に言い表している。もし蠍が普段どこでも見なれた昆虫だったなら隠喩の効果は半減してしまうが、右の詩の構成上、表現上の分析から見ても、前述の推定は正しいと思われる。

『詩経』以後の蠍のシンボリズムについて少々触れておきたい。『楚辞』大招に「魂よ南にゆくなかれ、蠍が躬を傷つけん」とあるように、ほとんど前述したような危害を加える恐ろしい虫のイメージが用いられる。柳宗元の嶺南詩の「射工巧みに伺う游人の影」も同様である。ただ皮日休の鹿門隱書の「寒泥室を窃み、子の頭は母に通ず：民淫蠍た為り」は、前記の『漢書』五行志におけるエロティシズム的解釈を踏まえている。同書の前に引いた条の後段には、蠍の発生は嚴公が齊から淫女をめとろうとしているからだである。

災異をもたらす虫のイメージとして、『漢書』五行志の別の箇所では蜚と並列されているが、顔師古の注という通り短狐でいかどうかはやや問題がある。『呂氏春秋』任地篇では、「螟蠍」と熟して用いられ、高誘の注に「葉を食らうを蠍と曰う」とあり、農作物を食害する虫である。鄒樹文氏はさかのぼって『春秋』莊公十八年の「秋に蠍有り」の蠍も禾稼の害虫とし、更に『詩経』の蠍も同じもののだとしている。氏によると短狐がタガメであり、蠍は別物

だという。そうすると何人斯篇の隱喻も見方が変わってくる。蛾は粘虫（ヨトウムシ）であって、この虫が大発生するとき、最初は気づきにくく突然の感がある。したがって『詩経』の詩人は蛾と鬼でもって「隠現無常」にたとえたのだという。⁽⁵³⁾この解釈も成り立ちうるが、筆者は古典の注釈者の説（たいてい蛾と短狐を同じとする）を取る。螟蛾の蛾と本来の蛾とは同名異物なのである。

注

注記以外の参考文献については前稿を参照されたい。

- (1) 周堯『中国早期昆虫学研究史』二五—二六頁。
- (2) 鄭樹文氏は、幽風・七月篇の莎雞を紡織娘、蟋蟀を蚰蚰児と訳す（『中国昆虫学史』二四頁）。紡織娘と聒聒児は同じで、クツワムシ。蚰蚰児はコオロギの俗称である。ところが周堯氏は莎雞を *Trilophidia annulata*（タイワンイボバッタ）に当てる（『中国古代昆虫研究方面的成就』、科技史文集、第四輯、一九八〇年）。
- (3) 『和名抄』は促織、蜻蛉、蟋蟀を別々に立項している。蜻蛉には「古保呂岐」の訓を与えているが、これは現在のカマドウマのことらしい。狩谷校斎の言う通り、三者とも「歧利歧利須」（現在のコオロギ）と訓じるべきである（『箋注倭名類聚抄』卷八）。
- (4) 西村真次『鳴く虫の研究』六一頁、一九〇七年（明治四〇年）、東京。
- (5) 陸璣の説は緯書の『春秋說題辭』の「趣織の言たるは織を趣^{なが}すなり。織興り事遽かなる故に趣織鳴き女作兼ぬ」（『太平御覽』卷九四九所引）や、『易通繫卦』の「蟋蟀の虫は陰に随い陽を迎え、壁に居りて外に向かい、婦女の織績を趣^{なが}す」（『古今圖書集成』博物彙編・禽虫典卷一七五所引）などの記事に基づくと思われる。
- (6) 王念孫『広雅疏証』卷十下、釈虫（但しこの箇所は王引之の著述）。郝懿行『爾雅注疏』下之三、釈虫。
- (7) 中国の気象学の權威であった竺可楨氏の定義によると、「物候学とは主に自然界の植物（農作物を含む）・動物と環境条件（氣候、水紋、土壤）の周期的変化の相互關係を研究する科学である」とされる。竺可楨・宛敏渭『物候学』科学出版社、一九八〇年、一頁。
- (8) 宛敏渭・劉秀珍『中国物候観測方法』科学出版社、一九七九年、四〇頁。

- (9) 竺可楨・宛敏渭、前掲書、六五、六六頁。
- (10) 陝西省西安、あるいは河南省洛陽の物候を記したと考えられる『逸周書』（おそらく先秦の記録）と現在の北京の物候を比較すると、実際は北京が二二日、二九日遅いという。竺可楨・宛敏渭、前掲書、六九頁。
- (11) 夏緯瑛『夏小正經文校釈』農業出版社、一九八一年、八頁。
- (12) 七月篇の「十月蟋蟀入我牀下」のあと新年（周曆による正月）を迎える準備が歌われており、蟋蟀のモチーフは秋よりはむしろ年末という時節の到来にウェイトがかかっている。
- (13) G・サートン『古代中世科学史・Ⅲ』平田寛訳、岩波書店、一九五四年、七七頁。なお、「促織經」以後の文献では、明の袁宏道の「促織志」（上海古籍出版社『袁宏道集箋校・中』では「畜促織」となっている）、明の劉侗の「促織志」などがある（後の二つは『古今圖書集成』に収む）。
- (14) 「辞海」（生物分冊）は *Porcelio*、新註校定国訳本草綱目』は *Porcelio scaber*（フラジムシ）とする。
- (15) B.E.Reed, *Chinese Materia Medica—insect drugs*, 1941, P. 133.
- (16) すでに『本草和名』が廢の条でも「於女牟之」の訓を与える誤りを犯した。廢は *Eupolyphaga sinensis*（シナゴキブリ）に当てられている（『中葉大辞典』）。
- (17) 王念孫、前掲書。
- (18) 『太平御覽』卷九四九は陶弘景の「人家此を用い、人を説媚せしむ」の文を引くが、「婦と書くのは理にもとる」と述べている後にこの文が来るのは、若干疑問が残る。
- (19) 拙稿「食べもの漢字のシンボリズム」（『華味三昧——中国料理の文化と歴史』講談社、一九八一年）を参照。
- (20) 拙訳『詩經（上）』学習研究社、一九八二年、五〇七—五〇八頁。
- (21) 陶弘景は「術家はその網を取り衣領に着ける。そうすると忘却を避ける」と述べている。
- (22) 王国維「爾雅草木虫魚鳥獸名釈例」（『觀堂集林』所収）。なお、拙稿「虫の博物誌——詩經の博物学的研究(1)」の1条を参照。
- (23) 蜘蛛は跕躄（行っては止まる）の意であろう。藤堂明保『学研漢和大事典』中の蜘蛛の解説を見よ。
- (24) 石声漢『中国農学遺産要略』農業出版社、一九八一年、四二頁。耿煊『詩經中的經濟植物』台湾商務印書館、六七頁。
- (25) 遊糸という現象の科学的解明は最近のことのようである。錦三郎氏によると、「集団のクモが尻から糸を空にふき上げ、

その糸の引く力で空へ飛び立ち、空中移動するときのクモの糸」だという（「クモの空中移動」『万有百科大事典20』小学館）。

(26) 例えば沈約の三月三日率爾成篇の詩に「遊糸映空転」の句がある（『文選』卷三十）。

(27) 今村与志雄訳注『酉陽雜俎』第三卷、平凡社、一九六一—一九七頁参照。

(28) 因みに『動物学大辞典』では、本来螢の異名とされる耀夜、宵燭、熠燿などにそれぞれ別の種名を当てている。

(29) 螢火を燐（鬼火）とする毛伝の説は、孔穎達の正義が否定している。しかし燐は螢火の異名になり（『古今注』）、時代は下るが、螢火を人魂とする民間信仰もあったようである。

(30) 小野蘭山は螢蛆をツチボタル、宵行をクサボタル、またムシボタル（ツチボタル）とし、リードは螢蛆を glow-worm（ツチボタル）としている。

(31) 矢野宗幹は「螢蛆、和名ミチホタル、又ミスボタル、螢の幼虫なり。或は螢の類にして、雄は翅を以て飛翔すれども、雌は翅退化して飛ぶ能わず、蛆状を呈するものあり、之を指すか」と述べている（『国訳本草綱目』）。

(32) 毛奇齡『西河合集』（茅原定『詩經名物集成』所引）。

(33) 熠燿を虫の名とするのは誤りで、宵行が正しいと断定したのは李時珍である。

(34) 李時珍は「宵行と名づけるのは、茅竹の根、夜に視れば光あり、また湿熱の氣に感じて遂に変化して形を成すのみ」と言うが、行の意味は不明。宵行と似た名の昆虫に行夜（ヘビリムシ）があり、李時珍は「夜中を好んで行く」虫だとしている。宵行もこの類の命名であらう。

(35) 鄒樹文、前掲書、二六頁。

(36) 蛸はウワバミ、蛸はボア（『動物学大辞典』）。『辞海』は蛸も蛸もニシキヘビとする。蛸は蝮と同じとする説（『本草綱目』、『動物学大辞典』）と、タイワンハブに当てる説（『国訳本草綱目』）とがある。蛸はカラフトマムシ（『動物学大辞典』）、または、クサリヘビ（『中国蛇類図譜』）。

(37) 『説文』ではまた虫の後に蝮が配列され、「蝮は虫なり」とある。

(38) 顔師古の引用は『山海経』の南山経と北山経の郭璞注をつぎ合わせたもので、文にやや異同がある。郭璞注では「長さ百尋」とか「大なる者百余斤」などであり、本の性質上空想的色彩が加わっている。

(39) 『朝日ニラルース 世界動物百科9』、朝日新聞社、一九七五年。

- (40) 『中国蛇類図譜』 上海科学技术出版社、一九八〇年。
- (41) 『中藥大辞典』上冊、七—三頁。
- (42) 『中国蛇類図譜』一五〇頁。『中藥大辞典』下冊、二六〇九頁。
- (43) 内田清之助(代表)、『日本動物図鑑』北隆館、一九四七年版。
- (44) 拙訳『詩経(下)』学習研究社、一九八三年、一一〇—一一六頁。
- (45) 拙稿「連理比翼のモチーフについて」『漢文教室』(大修館書店発行)第二一八号、一九七六年。
- (46) 『中国蛇類図譜』四—頁。
- (47) 林羅山『多識編』は守宮にイモリを当てている。
- (48) リード、前掲書、一七八頁。
- (49) 周堯、前掲論文(注2参照)。なお、同氏の前掲書でも触れている(二〇頁)。
- (50) リード、前掲書。なお、『山海経』大荒南経に蜮を食う蜮民国のことが出ている。この空想的な異人国が蜮の空想化に—
役買ったかもしれない。
- (51) 素木得一『昆虫の分類』北隆館、一九五四年、二五七頁。
- (52) 何人斯篇のテーマの解釈は説者によって大きく異なる。筆者の解釈については、拙訳の前掲書、一七六—一八一頁を参照
された。
- (53) 鄒樹文、前掲書、一九頁。

〔付記〕 本研究は一九八二年度文部省科学研究費(一般研究)の補助を受けてなされるものである。